

大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】 大学教育推進プログラム

体系的な HPS 養成教育プログラムの開発

静岡県立大学短期大学部

平成 22 年度 事業成果報告書

目 次

第Ⅰ部 プログラム概要

第Ⅱ部 実施報告

1. 平成 22 年度事業実績
2. 海外現地調査
3. HPS セミナー&ワークショップ開催
4. 遠隔地双方向授業システムの運用と新規システムの導入
5. ホームページの運用
6. ホスピタル・プレイ研究活動支援

第Ⅲ部 資 料

1. 「大学教育改革プログラム合同フォーラム」展示資料
2. HPS セミナー&ワークショップ
3. 新聞記事

文部科学省

大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム

「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」

プログラム概要

プログラム概要

平成 21 年度文部科学省大学教育推進プログラム「大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】」で採択された本取組は、本学のこれまでの HPS 養成教育事業で培った教育力と育成した人材などを最大限に活用し、HPS（ホスピタル・プレイ・スペシャリスト）としての専門性の確立・向上及び医療現場での専門職としての定着を迫る一貫した HPS 養成教育プログラム構築：第 1 ステップ「HPS 入門講座」、第 2 ステップ「HPS 養成講座」、第 3 ステップ「上級 HPS 講座」に向けての準備プロジェクトである。

本取組は、看護師や保育士養成を行う医療・福祉系短期大学の個性や特色を踏まえ、短期大学士教育課程における学士力を高め、そのための教育力を向上させるため、本学学生を対象とする HPS 入門講座開講に向け、1) 養成教育モデル、2) 効果的教授法モデル、3) 産学連携による小児医療モデルを開発・実行し、その評価を行うものである。他大学や病院等との連携・協働のもと、ファミリー・センタード・ケアの理念に貫かれた実践的な養成教育プログラムを開発するために必要な内容や方法等を開発する本学の挑戦である。

1. 背景

静岡県立短期大学部では、平成19年度より文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」委託事業として、離退職保育・看護師を対象とする「HPS養成教育プロジェクト」を実施した。日本初の本格的なHPS養成講座の実施により、事業最終年度の平成21年度までに5クールが終了し、62名の講座修了生を輩出している。そのうち47名がこれまでわが国の医療現場等でほとんど注意が払われてこなかった、子どもや家族に寄り添うホスピタル・プレイを病院や福祉施設において積極的に展開し、子どもにとって医療との関わりが肯定的な体験になるように働きかけるという革新的な試みにチャレンジしている。

小児医療での「Family Centered Care（家族中心の医療福祉）」の理念を実現するため、本学の次段階の取り組みは、総合的・多層的なHPS養成教育プログラムを完成させることである。他大学との連携も視野に入れ、1) 本学の専門職養成教育でHPSの視点を身につけた看護師や保育士等の養成、2) HPS養成事業の継続による本格的なHPS育成、3) 医療ケアとプレイサービスをマネジメントする上級HPS（プレイ・コーディネーター）を輩出する一連の戦略的人材養成教育プログラムの構築が求められている。

2. 目的

本取組は、HPS としての専門性の確立・向上及び医療現場での専門職としての定着を追求する一貫した HPS 養成教育プログラム構築に向けての準備プロジェクトである。平成 22 年度以降「学び直し」HPS 養成事業を継続的に実施し、この事業を HPS 養成過程の第 2 ステップに位置づける。その次ステップとして、経験・実績を積んだ実力を有する HPS を対象に、困難ケースに対応できる上級 HPS の育成を第 3 ステップで目指す。そして、本学学生対象に基礎資格の段階で HPS マインドをもった看護師・保育士などを養成する第 1 ステップを HPS 入門講座とする。

これら体系的な HPS 養成教育プログラム構想に向け、HPS 養成教育モデルの開発、教育方法モデルの開発、そして産学連携による小児医療モデルの開発が本取組の目的である。

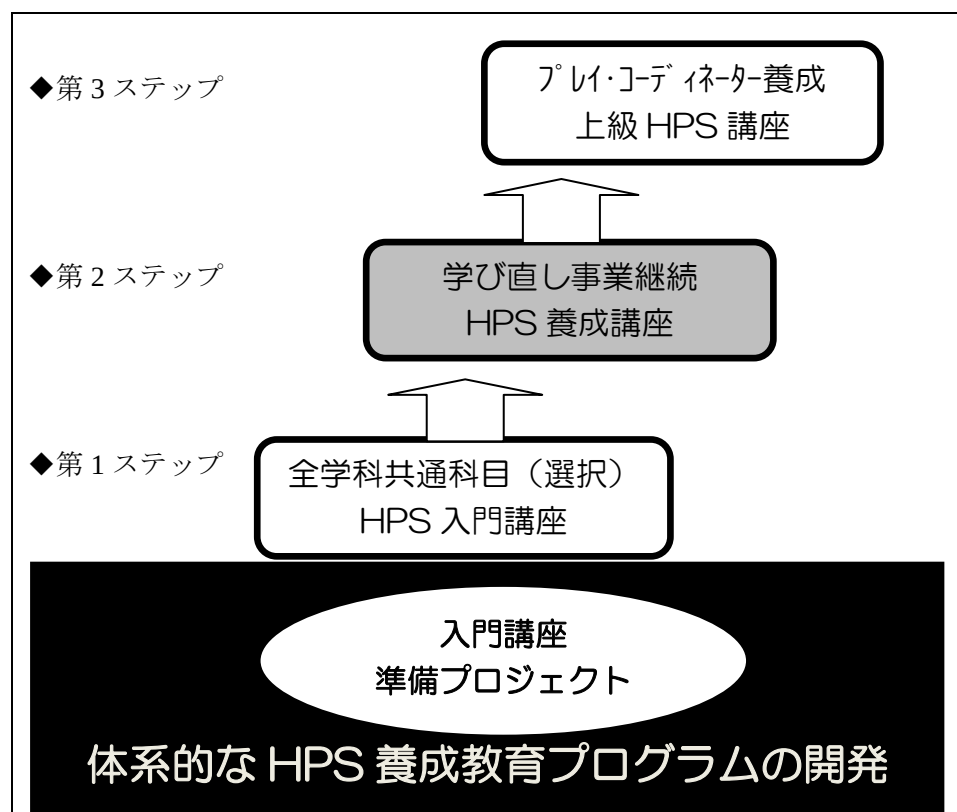


図1 体系的HPS養成プログラム構想

3. 各開発モデルの概要

本取組は、以下の教育3モデルの開発を平成23年度までに行い、その後は本学教育の柱として、学士力確保や教育力向上を目指すHPS入門講座を開講すること及び第1から第3ステップからなる体系的HPS養成教育プログラム構想の実現を大きな達成目標とする。

1) 養成教育モデルの開発

本学の医療・福祉系専門職養成教育の中に HPS 入門講座を取り入れ、主体的に講座を履修する学生に HPS としての視点から対象者中心のケアに関する知識・理解、対人援助技術、専門的倫理・価値、クリティカルで創造的な思考力を身につけさせるための養成教育モデルを開発する。その内容は、明確なラーニング・アウトカム指標に基づき、履修カリキュラム、教育目標・内容、標準テキスト、補助教材、学習ポートフォリオについて協議・検討し、設定及び作成を行う。そのため、英国ホスピタル・プレイ・スタッフ協会との連携により、英国 HPS 養成大学から視察及び打ち合わせに講師を招聘し、その後は運営実行委員が英国研修を行う。このモデル開発により、医療・福祉系短期大学の学士力確保の一つのあり方を示すことも大きく期待される。

2) 効果的教授法モデルの開発

HPS 入門講座における教育方法が効果的で適切に実施されることを目的に、入門講座で講師を依頼する学び直し HPS 修了生への教授法研修、ティーチングポートフォリオ技法、小グループによる双方向型アクティブラーニング学習法、地域課題（退院後の在宅重症心身児・家族の孤立化など）解決に向けたサービス・ラーニング手法、遠隔地授業実施に向けたシステム等を開発・導入し、試験的に短期大学での教育に取り入れていくことで評価・改善を目指す。そのため、優れた教授法を先駆的・実践的に大学教育に取り入れている国内大学等での研修や講師派遣を行う。このモデル開発により、HPS 養成教育に関わらず、大学教育の講義・演習・実習科目の先駆的・実践的な教授法を明確化することが成果として期待される。

3) 産学連携による小児医療モデルの開発

HPS 修了生及びその所属する病院・施設とのこれまでの相互連携を生かし、1) 病児及び家族を対象とする病院に特化、2) 障害児及び家族を対象とする福祉施設に特化、3) 自宅療養する子ども及び家族を対象とする在宅支援に特化した HPS の専門性とその養成教育の確立等を目指す。これらを総合的に進め、英国 HPS 養成教育機関との協力とともに、第 1 から第 3 ステップまでの HPS 養成教育プログラム構築について検討し、段階ごとの教育目標や内容を明確化した養成モデルを開発する共同研究を行う。病院・福祉施設・在宅療養での子ども・家族中心の医療ケア実現の実践・研究を進め、研究報告を行うとともに、協働で HPS の社会的認知度を高めるパンフレットを作成する。

4. 予算

各年度予算は以下の通りである。

年度	21 年度	22 年度	23 年度	合計
申請額	24,000,000 円	13,000,000 円	12,000,000 円	49,000,000 円

(社会福祉学科 江原勝幸)

平成 22 年度
実施報告

平成 22 年度事業実績

1. 実施体制整備

本補助事業 3 か年の活動展開で根幹をなすのが実施体制の整備である。その体制は、平成 19 年度から 21 年度に本学が採択された「離退職保育・看護資格保有者のキャリアアップのための HPS 養成教育事業」（平成 19 年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」）の実施体制を基盤に、本取組の内容等に即してより発展させたものである。その事業実施体制及び評価体制は図 1 に整理した。

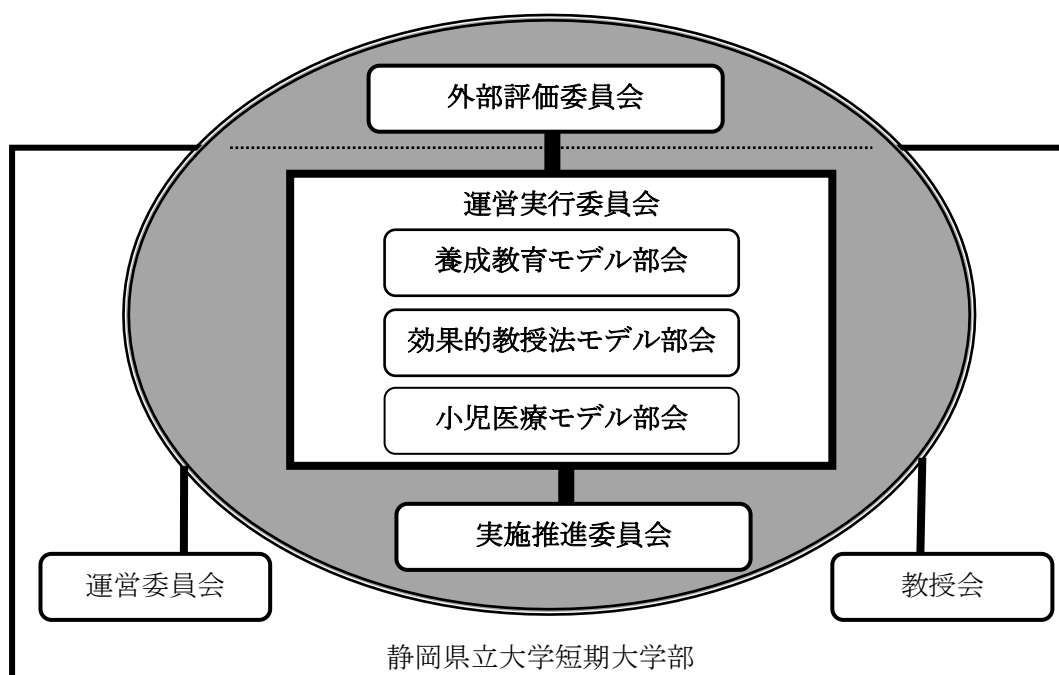


図 1 事業実施体制及び評価体制

事業実施体制の整備として、本学教授会の審議を経て、本事業「実施推進委員会設置要領」が承認された。この実施推進委員会は、本事業の事業内容や本事業の運営体制、進捗状況、経理内容、本事業終了後の取組などの事項を実施する組織を規定する実施要領を定めることにより、本事業が円滑・適正に実施されることを目的とするものであり、委員には学部長（委員長）、本事業取組担当者、各学科・専攻等教員群からそれぞれ選出された教員各 1 名、その他部長の指名する者とし、学長にはオブザーバーとしての委員会参加を求めている。

昨年度第 1 回の実施推進委員会では「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発実施要綱」が定められ、この実施要綱に基づき、本事業の中核的な活動展開を担う学内委員会を規定する「運営実行委員会要領」及びその運営状況等の重要事項に対して助言・評価する外部委員会を規定する「評価委員会」がオーソライズされ、本事業を実施する組織体制が整備された。

運営実行委員会委員には、これまでの本学 HPS 養成教育運営実行委員会委員を充て、学内教員及び学外の有識者等で構成される（1）養成教育モデル部会、（2）効果的教授法モデル部会、（3）産学連携による小児医療モデル部会を組織し、入門講座実施に向けた教育内容、教育方法、産学連携による小児医療プロジェクトについて協議・検討を行う組織体制を整備した。図 2 は事業実施体制の組織図及びその構成員である。



図 2 事業実施体制

2. 事業実績

平成 22 年度事業実績として、運営実行委員会委員及び本学事務局（事務部長、学生室長、総務室長、総務室長補佐、会計担当者など）が参加する運営実行委員会を 12 回開催し、本取組の各事業等の検討・協議を行った。実施推進委員会は四半期に一度定期的に開催され（6 月、9 月、12 月、3 月）、そこでの報告・承認を経て、その開催月の本学教授会に報告され本学教員への本取組の周知を図った。

各モデル部会については、3 モデル開発部会の活動として、遠隔地双方向授業システムを活用した合同モデル部会を 2 回開催し、各モデル開発部会を単独で各 2 回開催した。各モデル部会での活動状況の概要は以下の通りである。

- 1) 養成教育モデル部会(養成部会)では、HPS 入門講座の科目設定に向けた授業の目的や到達目標について検討し、授業内容について標準テキストの項目設定や学習ポートフォリオの内容について協議を行った。
- 2) 効果的教授法モデル部会(教授法部会)では、少人数の意見交換を基盤とする学生主体の学習法を HPS 修了生が身につける研修技法について主に検討した。遠隔地双方向授業システムの試験的運用は毎月最低 1 回以上の頻度で実施し、Skype 通信の導入、簡易版マニュアル作成、不具合の対応などに役立てた。
- 3) 小児医療モデル部会(小児部会)では、小児医療チームの中で HPS の専門性を発揮するための役割・機能を明確化し、医療者などにそれが理解されるための手法について検討した。また、HPS 入門講座のアウトカム指標設定のため、HPS 養成講座の受講生による実習日誌や修了生レポートなどを用いて一覧表にまとめた。ここで得られたアウトカム指標は第 2 回合同モデル部会で示した。

また、外部評価委員会を 3 月に開催し、運営実行委員会及び各モデル部会の活動について外部評価委員に報告し、今後の活動展開に向けて意見を聞くヒヤリングを実施した。外部有識者の意見等は、その後の運営実行委員会や各モデル部会での活動に反映させ、HPS 入門講座や体系的な HPS 養成教育プログラムの開発に役立てた。

3. 部会開催記録

内 容	開催日	出席者
合同モデル部会	6 月 3 日	学長、学部長、松尾部会員、米谷部会員、中原部会員、小長谷部会員、原崎部会員、柳澤部会員、尾崎部会員、江原部会員、松平部会員、立花部会員、吉田部会員、事務部長
教授法部会	7 月 8 日	天野部会員、米谷部会員、中原部会員、吉田部会員
養成部会	7 月 27 日	天野部会員、松尾部会員、中原部会員、小長谷部会員、江原部会員、松平部会員、立花部会員
小児部会	7 月 30 日	原崎部会員、尾崎部会員、柳澤部会員、熊谷部会員、江原部会員、松平部会員
小児部会	10 月 28 日	尾崎部会員、柳澤部会員、江原部会員、松平部会員、立花部会員
養成部会	11 月 4 日	天野部会員、松尾部会員、中原部会員、松平部会員、立花部会員
合同モデル部会	2 月 19 日	フランス部会員、松尾部会員、米谷部会員、中原部会員、小長谷部会員、天野部会員、原崎部会員、柳澤部会員、尾崎部会員、熊谷部会員、松平部会員、江原部会員、立花部会員、吉田部会員

(社会福祉学科 江原勝幸)

海外現地調査

調 査Ⅰ：

- (1) 日 程：2010 年 6 月 13 日～2010 年 6 月 20 日
- (2) 調査地：英国スコットランド，アイルランド

調 査Ⅱ：

- (1) 日 程：2010 年 11 月 16 日～2010 年 11 月 21 日
- (2) 調査地：アメリカ合衆国

調 査Ⅲ：

- (1) 日 程：2011 年 3 月 7 日～2011 年 3 月 10 日
- (2) 調査地：香 港

(社会福祉学科 松平千佳)

§ 調査 I：英国およびヨーロッパにおける HPS 養成教育に関する調査

本調査の目的は、スコットランドのエジンバラに位置するスティーブソンカレッジにおいて、HPS 養成教育に関する事柄を調査すること、またアイルランドはダブリンにおいて開催された Europe Association of Children in Hospital の国際会議に参加し、病児に対する各国の支援内容を研究することにあつた。

調査の前半は、スティーブソンカレッジにおいて、HPS 養成コース責任者のフランシス・バーバラ氏と教育カリキュラムに関する意見交換を行いながら、また具体的に用いる教材などを見せてもらい、英国における HPS 養成教育の現状を把握した。



(英国スティーブソンカレッジ・フランシス氏)

Further studies に位置づいている HPS 養成は、徹底した教育アウトカムにおいて管理されている。6 つのユニットからなる HPS 養成カリキュラムは、それぞれの科目名称は決まっておらず、あくまで教える内容と求められるアウトカムが提示されているのである。そのため、15 回の講義を教えたらそれで 1 つの単元が完結するというわけでもなく、そのグループの学ぶ速度や習熟度を測りながら、特に時間をかけないといけないユニットには時間をかけ、そうではないユニットは早めに進めるなど、受講者の習熟度を見極めるコース責任者のきめ細かい観察が必要となる。

また感心を抱いた事例は、成績評価のあり方である。例えば HPS 養成コースに入った場合、多くのレポートを作成し提出する必要があるが、すべて Internal Examiner (責任者以外の内部評価者)と External Examiner(外部評価者)を含めた 3 名の評価が入ることになっている。

EE は Edexcel(資格の教育内容の水準を保つために政府が設立している評価基準組織)から派遣され、年に2回カレッジを訪問し、受講生の学びをすべて点検する役割を持つ。

現地では受講生に対し、「日本における HPS の活躍と教育」という講義を行った。日本に対するイメージはあくまでメディアからのものであり、講義内容は新鮮であったようだ。特にいくつか日本の HPS が作成したツールを持っていったのだが、それらのアイデアなどには大きな賞賛があった。



(英国スティーブソンカレッジ・HPS コース受講生)

調査の後半は、アイルランドに入り EACH 国際会議に出席した。今年度は、ダブリンで新しく建設予定のこども病院に関する内容が中心の会議であった。200 名程度の参加者がヨーロッパ全土から、また北米から参加していた。アジアからの参加は日本だけであった。



(アイルランド HPS)

会議の中で印象深かった内容として、アイルランドの Health and Children 大臣による講演が挙げられる。小さい国とはいえ、大臣が非常に詳しく状況を把握しており、こどもの問題についても精通していることに驚いた。また、多くの親の会とも親しい様子で、納税者の最善の利益を求めるという姿勢が鮮明に出ていた。1つの省として健康とこどもに関する省があることは、いかにこの国が「こども」の育ちについて真剣に向き合っているのかが伺えるし、またそれはヨーロッパに共通した意識であると感じている。市民として参加する姿勢を育てるための国の取り組みが、大変羨ましく思った。

文化の融合に関する興味深い講演もあったが、この新病院はまだ建設に反対している者も多くいるようで、そもそも建設の是非に対する質問があった。17階建てのこども病院であること、また地下にAE(救急)を備えるという考えには私自身も疑問を感じた。

会議の中で、1つ質問を行った。それは、親の面会時間の制限に関する内容であった。ヨーロッパには親に面会時間を設けている子ども病院はない。経済先進国は通常、権利という意識も育つために、子どもと親とを引き離すことはできないと考えることが一般的である。しかし、日本ではまだまだ親を治療のパートナーとして考える土壌は育っていない。そのため、親に対する関わりが不十分であると考え。聴衆は、日本の現状に驚きを隠せないようであった。



(EACH 国際会議の様子)

EACH 国際会議の加盟団体になるという協議も、理事会の場面で合わせて行われた。英国、スイス、フランスが代表理事であるが、前回の英国研修においてインタビューを実施した英国理事のペグ・ベルソンが強く我々を推薦し、スイスも私との話し合いの結果、日本における病児の扱いに対して大きな良い変化をもたらすことのできる可能性が団体にはあると判断した様子であった。そして、2012年の理事会総会にて正式加盟という運びになることが決まった。なお、2012年には現在の日本の加盟団体である NPHC が脱退する。

§ 調査Ⅱ：北米における CLS 養成のあり方と小児医療における役割

本調査の目的は、教育 GP における課題の 1 つである、北米を中心とするチャイルド・ライフ・スペシャリスト(以下、CLS)養成教育の現状を把握することである。大学間連携も視野に踏まえ、現地調査によって日本型の養成教育のあり方を検討する。

1. Bank Street College への訪問調査

CLS 養成コースを設置する Bank street college への訪問は、非常に実りの多いものであった。実際に 2 つの授業に参加させて頂いたが、1 つ目の講義では、初めに CLS の 25 周年記念 DVD を見ることができた。多くの先人たちの言葉を編集したものであり、歴史的な経過を知る上でも、貴重な資料であると感じた。その後、現在 CLS として活動している卒業生にインタビューを実施した。



(Bank street college・CLS)

彼女たちは英国同様に、さまざまな領域に配置されており、各病棟の特徴に合わせた活躍をしていると感じた。また、彼女たちの強い決意や情熱に深い感銘を受けるとともに、このような強い決意を持つ人々が働くことによって、まだまだ発展する可能性のある職業であると改めて感じた。日本ではしばしば、これ以上進めないと、諦めてしまう人がいるが、このことについて考えていきたい。

卒業生に対する質問の中で、「我々と子どもの心理士との違いは何か」との質問があった。余り明確な答えがなかったように覚えているが、これについては明確であり、1 つは遊びを強力なツールにしている点である。もう 1 つは、心理士や訓練士が特定の子どもの状態を「良くする」ことに焦点を置くことに対し、CLS や HPS は全ての子どもを対象として働く

職種であり、何かを「良くする」ことも目的の 1 つではあるが、それが最も大きな目的ではなく、むしろ子どもにとっての当たり前を病院という極端な環境において作り出すことに、その役割があるのではないかと考える。



(Bank street college 「子どもとアート」の授業)

また、DVD には Peg Belson やニュージーランドの HPS 協会の関係者がコメントを寄せていたが、その紹介の中に全く HPS という言葉がないことに対しては違和感を覚えた。2 つの職業を考えたときに、名前や何処で教育するのかといった点は違えども、その役割や目的は同じであり、本質的な違いを覚えない。実際のところ、インタビューを受けていた CLS 創始者のエマ・プランクは、全ての医師が少なくとも 1 ヶ月間、子どもの遊ぶ姿を見たり一緒に遊んだりする経験が必要であると話していた。

ここにまさに、CLS の神髄があると感じた。ハリファックスの病院で働く老小児科医のゴールドブルーム博士が、カナダのある小児科教育では、小児科医の卵には重度の障害を抱えるお子さんのご自宅に数週間訪問させる教育を行う、ということを教えてくれた。この教育には、目の前にいる子どもの向こう側を見ることのできる医師を育成する力があると話していたことを思い出した。

ART の授業にも参加させていただいた。ここで会った学生は 2 年生であったため、討論も活発であると同時に非常に鋭いものであると感じた。優れた教育の成果を感じる学生のグループであった。ART という領域は確かに、まだまだ日本の病院環境では取り入れられていない領域である。もっと ART の力を借りる学びを展開しなければならない。

2. Morgan Stanley 病院への訪問

Morgan Stanley 病院では、CLS が開催する温かな雰囲気 of 朝食会で迎えられた。CLS のチームからは力強さを感じたし、Toni は CLS チームの発展に大きく寄与していることを感じた。CLS のチームが日々、子どもの支援に取り組んでいることを実感した。



(Morgan Stanley 病院・CLS)

朝食会では、多くの時間が日本やその他の国における現況について話し合いが持たれたが、実際のところ多くの国で病児を支援する専門職が存在しているが、それらをつなぐ国際的なネットワークはまだ構築されていない。個人的な意見としては、EACH がその役割を果たしていると思うので、CLSC が参加することは重要であるように思う。しかし一方で、米国は UNHC の子どもの権利条約を批准していないため、そのような部分でヨーロッパとの差異があるのかもしれない。

子どもの権利宣言は、2つの世界大戦において多くの子どもとその未来を犠牲にしたという深い反省のもとに作られており、この条約を理解することはチャイルドケアを行う上では必要不可欠であると考えます。EACH が作成した、The Charter of Children in Hospital もやはり子どもの権利条約をベースにしている。

しかし、日本は批准しているにも関わらず、そこで決められている条約のほとんどが病児については守られていない。親の面会時間の設定、きょうだいの面会の禁止、子どものベッド上の拘束、採決の際の親の入室の禁止など、すべてが子どもの権利を守る行為から離れて行っている。日本はまずこの部分の改善から開始しなければならない。なぜなら、どんなに優れたプレパレーションを実施したとしても、親がいなければきっとその子どもは自信を維持できないであろう。

Toni との意見交換は実り多いものであった。Toni が CLS の専門性を発展させるという自覚を強く持ち、この仕事に従事していることを感じる体験であった。この成果を基に、CLS のコンピテンシーを分析し、それを日本の教育の中にも取り入れていこうと考えている。

その後、短い時間ではあったが、Mount Sinai 子ども病院を訪問することができた。ここでは art が大きなテーマであると感じた。そして、この要素をもっと取り入れていかなければならないと改めて考えた。目の前にあるセントラルパークも使えたら、どんなに素晴らしいだろうと思った。遊びには、特に自然の中の遊びにはすでに治癒的な要素がふんだんに含まれている。

3. The Power of Play の作者、David Elkind へのインタビュー

DAVID Elkind との会話も興味深いものであった。21 世紀を経済価値と人間価値との戦いと評した彼は、子どもの将来を憂いていた。印象深かったことは、20 世紀は最も人類が技術においても思想においても発展した時代であるにも関わらず、最も多くの血を流した時代であることである。つまり、人間の進歩が必ずしも人間の幸せを作らないことを意味しているのかも知れない。彼の本を日本語に訳して紹介したいと計画している。

4. Wheelock College への訪問

Wheelock College への訪問もまた、実りの多いものであった。美しい建物であるこの大学は、ここで学びたいという気持ちを奮い立たせる環境があった。CLS 養成コースの講師である Claire は、個性的なやさしさとユーモアを感じさせる人物であった。彼女は広い視点で CLS の職能と将来を見つめており、彼女の考察は意義深いものであった。その後、Suzanne の講義に少し参加したが、学生の前向きな努力に感銘を受けた。Peter もまた、Wheelock における CLS の教育や日本人を受け入れることに対する考え方を共有してくれた。



(Wheelock College ・ CLS 授業風景)

§ 調査Ⅲ：香港における HPS 養成教育に関する調査

Playright Children's Play Association (以下：Playright)は、1987年に香港で設立された HPS 養成教育機関であり、平成 23 年度より香港大学において HPS 養成コースを設置する。HPS 養成コースの開設に当たり、Playright は 6 年前から教育カリキュラムと実習内容を協議、検討してきた。

そこで本調査は、①香港における HPS 活動状況の調査、②香港における HPS 養成教育の取組状況の把握、③香港において活動する HPS を対象とした意識調査を目的として実施した。

1. 香港の医療環境

病院や施設の衛生状況とその周辺の立地環境を確認した。SARS の流行以来、病院施設では消毒が徹底され、HPS 活動に必要な玩具等への衛生配慮も行われていた。

病院の立地環境については、香港全体で急な勾配が多く、さらに限られた土地を有効に活用するため、高層建築物が乱立している。その中で病院の多くは比較的郊外に建設されており、自動車の購入がごく一部の富裕層に限られるため、一般的な家庭ではバス等の公共交通手段によって通院(または見舞)を余儀なくされている。そのため、たとえば訪問ケアや在宅支援による医療サービスの充実は、ハード面での課題克服に一助となる可能性が推察された。

2. Blondi Kwok 氏との意見交換

Playright HPS 養成責任者である Blondi Kwok 氏との意見交換及び情報収集を実施した。主な内容は、以下のとおりである。

(1) Playright による香港での取組状況

Playright は 1987 年に設立され、公益金とスポンサー企業からの支援金等によって運営されている。「Advocacy」「Play Resources」「Play Outreach」「Play Environments」の 4 つを基軸とし、香港だけではなくアジア全体の子どもの療養環境改善に取り組んでいる。

遊びの重要性を指摘する点においては本学と共通しているが、子どもを対象としたレクリエーション(自然体験)活動やボランティア活動をプログラムの一部に組み込み、「Outreach」活動を積極的に展開することで取組の幅に広がりを持たせていた。また、民間企業からの支援あるいは寄付が広報活動へ繋がり、さらに報告書やリーフレット発行の際に支援企業を掲載することで、良好な財政システムを構築していた。

一方、現状の課題として、病院における医療費負担額の違いが挙げられた。すなわち、

保険が一律で適用される公立病院では患者は 30%負担であるのに対し、民間病院では個別の保険会社と任意契約する制度となっており、その負担額には大きなバラツキがあることが指摘された。



(香港 Playright)

(2) HPS 養成教育カリキュラムについて

香港大学における HPS 養成コースのカリキュラム資料を基に、現在の状況について説明を受けた。カリキュラムは主に、HPS としての心得、目標とする 4 つの基準、プログラムの内容と講師の紹介、最後に評価基準から形成されている。当該資料は、今後香港大学のシラバスに結び付くものであり、学生を対象にしたカリキュラムの問題点と特徴について意見交換を行った。

また、本学における本年度 HPS 養成講座のカリキュラムについて、講義コマ数や実習時間のあり方について議論を深めることができた

3. PRINCESS MARGARET HOSPITAL への訪問

PRINCESS MARGARET HOSPITAL にて香港の HPS 活動状況を調査した。当日は当該病院内の泌尿器科入院施設で見学を行い、検査室や処置室の室内環境、使用する玩具、他職種との連携状況について学んだ。特に、HPS の役割や活動記録が記載されたポスターが数か所に掲示され、施設内における HPS 活動の経過が見て取れるように工夫されていた。子どもとの信頼関係も築かれているようであり、見学中は頻りに子どもから HPS への積極的な働きかけが見られた。



(PRINCESS MARGARET HOSPITAL ・ 掲示スペース)

当該施設で勤務する Playright HPS の Iris Wong 氏から、活動内容について聞き取り調査を行った。強調された取組内容は、①母子の関係に注視したプレパレーション、②子どもの年齢と発達に応じて遊びを選択するディストラクション、③在宅支援などの積極的な院外活動であった。印象的な内容として、自分(子ども)の状態を投影させた人形を作成する子ども、怒りを医者モデルで表出する子ども等の事例があった。

なお、子どもの怒りの表出(あるいはコントロール)に関して、本学養成講座にて実施した「Volcano」を紹介し、そのアイデアについて非常に高い関心が得られた。香港では専門職としての職業分担が日本よりも明確であり、徐々にではあるが各病院において HPS の認知度とその役割が浸透している印象を受けた。しかし、日本の現状と同様に抱えている問題も少なくなく、今後も Playright と交流を重ねることで互いの発展に寄与しあう関係を維持していきたい。



(PRINCESS MARGARET HOSPITAL ・ 香港 HPS)

§ 平成 22 年度海外現地調査のまとめ

平成 22 年度は、欧州 HPS、米国 CLS、香港 HPS を中心とした調査を実施し、各現場の取組状況や課題を本学の現状を踏まえながら明らかにすることが出来た。

海外の現地状況について米国 CLS 調査を中心に振り返ると、現在、米国における CLS のスタイルには 2 つの流儀があるように感じた。1 つは、遊びを基軸にその力を学び、その力を応用させ子どもを支援しようとする方向性である。これは、極めて HPS の考え方に近いものであり、日本のチャイルドケアの専門家も理解しやすいものである。もう 1 つは、遊びという言葉を前面に押し出さずに、むしろプレパレーションや therapeutic activity 等、ベッドサイドで行う活動に重きを置く方向性である。

私は HPS であり、日本の子どもの療養環境を根底から変革するには、遊びの重要性を今こそ強調する必要があると感じている。また CLS、HPS の歴史的な発達から考えても、この職業の特性は「遊び」にあることは間違いない。遊びを軽視することなく、むしろ誇りに思い、教育を進めていきたいと考えているが、もう一方の方向性が存在する理由は現在の米国にて行われている小児医療の方法や、環境に大きく影響されていることが明らかとなった。

つまり、個室化して可能な限り早く集中的に治療を行い、在宅療養に戻す方法へと切り替わり、また責任の問題などプレイルームを維持しづらい環境、そして相互の関係性を作ることへの希薄化などが挙げられる。確かに、遊びの目的は遊びそのものにあるし、誰でもその感性に従えば遊びに参加できる。

しかし、その遊びの力を治療に積極的に取り入れ、英国の Standards for Children in Hospital

に指摘されているように、ケアプログラムに生かすことのできる専門職は HPS や CLS だけであると思う。子どもの精神そのものを輝かせる遊びの援助に、我々は誇りを感じ継続していかなければならない。

教育はやはり、その国の歴史や文化を色濃く反映させるものである。ほとんど全ての専門職教育を修士課程で行う場合には、CLS の教育もまた修士課程で行われることが望ましいのであろうが、日本のように教員もソーシャルワーカーも医師も大学でその教育が行われる国においては、CLS や HPS のような専門職養成は修士課程で行う必要性がないことが分かる。

また、1つの国で行われている教育が、もう1つの国でそのまま適応するわけでは決してなく、やはり必要なことはブレンドインすることであると考えます。現在行っている日本の HPS 教育について、専門家からの HPS 教育の分析を踏まえ、英国および米国における教育内容をしっかり取り入れながら、日本型の教育カリキュラムの確立を目指したい。

CLS 教育に携わる者が集まり、CLS 教育について意見交換をする場があると良いと思うし、そのような場が設定されればぜひ見学させて欲しいと感じた。そのためには、改めて協働することの重要性が指摘されよう。同じ志を持つものがいがみ合うことほど、悲しいことはない。ましてや、それはチャイルドケアの専門性とはかけ離れたものである。意見を出し合いながら、日本の子どもの最善のために、何ができるのかを継続して探りたい。

日本で行われている教育に対して、疑問や質問がある場合には直接ご指摘をいただきたい。先輩である英国の HPS や米国 CLS、そして香港 HPS とともに、日本の病児・障害児の幸せに貢献していきたい。そのためには、皆さまのご協力が必要不可欠である。

HPS セミナー&ワークショップ 結果報告

「遊びのもつチカラと価値を語ろう!」

— すべてのこどものために、すべてはこどものために —

本学では、平成 19 年度文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」において、ホスピタル・プレイ・スペシャリストの養成教育プロジェクトが採択された。以来、平成 21 年度の「大学教育推進プログラム（テーマ A）」で採択された「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」を合わせ、日本における HPS の普及とその人材養成に取り組んでいる。このプロジェクトでは初年度、事業の一つとして HPS 国際シンポジウムを開催し、多くの方々に参加いただき、好評を得た。

ところで、今後ホスピタル・プレイを社会の中に一層定着させていくためには、より多くの人々に HPS の存在とその役割を理解していただく必要があり、啓蒙・啓発活動は欠かせない。そこで今年度は、①HPS 養成講座修了生による Play 技術を広く一般に示し、遊びの持つ力と価値を明らかにする。②各モデル開発に伴う技術的な指導のあり方や教育方法について、様々な視点から検討し、HPS カリキュラムへ反映させる。以上、二つの目的をもって標記セミナー&ワークショップを開催した。

セミナー&ワークショップは 2 月 19 日（土）、本学を会場として行ったが、当日は県外からの参加者を含め、120 名あまりが集った。プログラムの前半は、教育 GP 基調報告と産学連携による療養環境整備に関する報告に、後半は HPS 活動の事例発表、ワークショップ、ポスター発表に当てた。

教育 GP における「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」では、三つの部会を中心にしてプロジェクトを進めているが、その一つである産学連携による小児医療モデル部会では、産学連携先である 6 病院を対象に玩具を貸与し、子どもの療養環境整備に寄与する活動を行っている。午前のプログラムは、各病院における現在までの取組状況とその成果を報告いただいたものである。その中で棚瀬佳見氏（あいち小児保健医療総合センター）は、心臓カテーテル検査および外来患児における MRI 検査のプレパレーションモデル開発を柱とし、患者とその家族を中心とした医療の取組状況を報告。各年齢層の子どもに対し、それぞれに適した遊びを模索していることが伺える内容であった。

大阪発達総合療育センターは、総合的なリハビリテーション及び重度心身障害児施設であり、発達段階に合わせた日常的な遊び支援から重度心身障害児に対する個別支援までを実施している。同センターに勤務する市川雅子氏は、誰もが携われる遊び支援について、遊びの安全性に着目しながら報告した。

望月ます美氏（静岡済生会総合病院）は、プレイルームや処置室におけるディストラクションについて、個別事例を通して玩具の有効性が検討されたことを報告。また、手術前の遊びと手術後の遊びの相違や、その時の感情を考慮した玩具の必要性が明らかにされた

ことも加えた。

小島広江氏（聖隷浜松病院）は、玩具や教材を活用した検査室の環境整備、子どもの発達に見合った遊び計画について報告した。遊び計画では、腎シンチ検査を受ける子どもを例とし、プレイルーム・検査室・検査それぞれの遊びについて効果と問題点を考察し、まとめた。

寺田智子氏（静岡県立こども病院）の報告は、ディストラクションツールについて、その効果と課題を検討したものであった。使用頻度の高かったディストラクションツールと子どもの年齢をまとめ、状況や子どもの年齢に応じた玩具の有効性を明らかにした。

最後に、小長谷秀子氏（静岡県立総合病院）は、プレパレーションが困難な発達年齢の子どもの恐怖心を軽減するため、子どもの情緒を考慮した子どものための療養環境の形成について報告。保護者や医療者の声を基に、玩具の使用法やチームでの取り組みが工夫されたことを語った。

午後の事例発表では、各地の病院で活動する HPS のうち、4 人から取り組みの様子が報告され、活発な質疑が繰り広げられた。

深井真由美氏（静岡県立総合病院）は、多職種と協働での退院支援と題し、入退院を繰り返す子どもに対し、多職種での連携の在り方、また家族に対するサポートの方法について検討したことを発表。その結果、子どもとその家族の生活リズムに合わせた支援が必要なこと、また多職種に働きかける重要性が示唆されたことを述べた。

二人目に登壇した杉山全美氏（静岡県立こども病院）の発表は「小児腎生検のためのプレパレーションについて」と題した。それは、腎生検におけるプレパレーションブックの作成や、腎生検のプレパレーション及びディストラクションについて検討を加えるもので、プレパレーションはその都度、内容を吟味していくことで、子どもに対する検査への理解度が向上することが確認されたと述べた。

田中久美子氏（あいち小児保健医療総合センター）は「心臓カテーテル検査プレパレーションツール」と題し、病院施設で実施したプレパレーションとディストラクションについて、アンケート調査を基にその効果を検証した結果を報告した。中でも、プレパレーションブックに対する評価が高く、楽しみながら理解できることがその大きな要因にあることを語った。

最後の豊田早苗氏（東京都立小児総合医療センター）は、都立小児総合医療センターにおける HPS 活動のはじまりを発表。外科手術におけるプレパレーションについて、医師や看護師、HPS 等がどのように連携していくべきかを考察したもので、子どもだけではなく、家族に対する検査や手術への説明、そして各専門職の役割を明らかにすることが極めて重要であることを述べた。

この後プログラムは、ワークショップとポスター発表を参加者の入れ替え制で同時に行なった。このうち、ワークショップは Frances Barbour 氏が講師を務めた。氏は、英国において HPS の養成に長年携わっており、スコットランド Stevenson College の HPS 養成コース

責任者である。同時に本学での HPS 養成講座では初回から毎回、1 週間にわたって授業を担当いただいてもいる。ワークショップでは『子どもにやさしい医療を提供するための方法』をテーマとしたが、氏からは子どもの気持ち(感情)に着目した医療の在り方が提案された。そのためにまず、子どもとの良好なコミュニケーション形成を切り口とし、子どもが自然な状態で遊びに入れることが重要であると説明。ここでのコミュニケーションは、言語を介したコミュニケーションだけに限らず、身振り手振りや顔の表情、さらには目の動き等が含まれていることを指摘された。

次に、その子どもの状態に合わせたコミュニケーションを取る方法として、キワニストールやパペットを使った遊びによる方法、さらにはアート制作を通して子どもの状態を知る手掛かりを見つける方法が紹介された。最後に、参加者が手作りのマスクを作成して、実際に自分の感情を相手へ伝えるワークショップが実施された。参加者の多くは、言語に依らずとも、簡単な材料と少しの工夫で自分の感情を実際に相手へと伝える手段があることを把握し、驚きを表す人も少なくなかった。

一方のポスター発表では、下記 4 件について各発表者による日常の活動内容が報告され、これを基に質疑応答や意見交換が活発に行なわれた。その 1 つ、訪問支援活動では、病院等の施設とは異なる課題や問題点が指摘され、その解決に向けたアイデアが多数出された。HPS の啓蒙活動に焦点を当て、遊びのもつ価値について、改めて理解を深めることができる報告もあった。

①SMA I 型の子どもに対する HPS 訪問支援活動報告 平野祐子氏（中部労災病院）

②HPS の遊び支援と障がい児の療養環境改善に向けた取り組み 市川雅子氏（大阪発達総合療育センター）

③HPS 養成講座を受講してからの 1 年間の取り組みと課題 入江慶太氏（川崎医療短期大学）

④チャイルド・プラネット in NCU★ 松井幸子・藤田えり氏（名古屋市立大学病院）

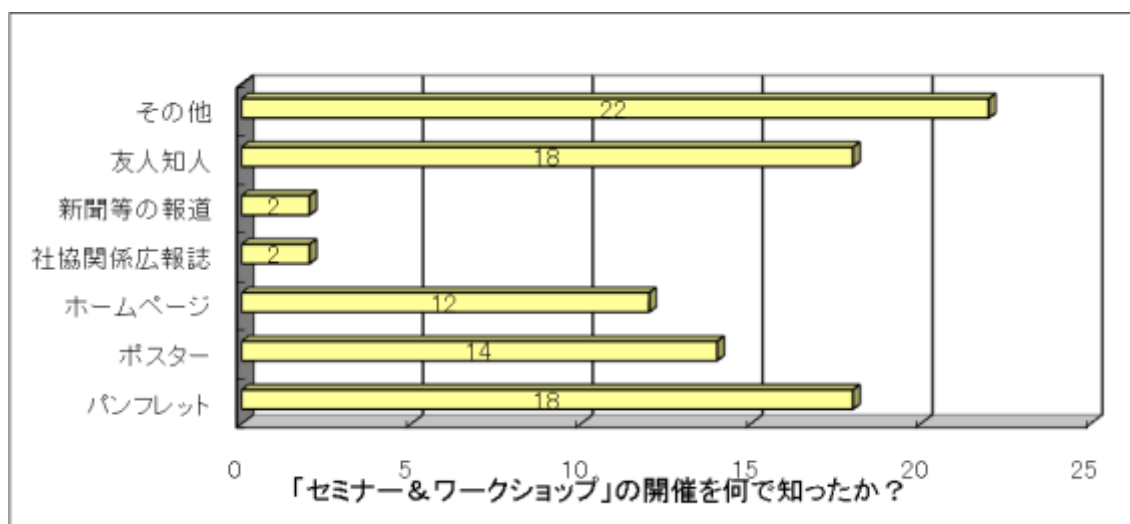
閉会に当たり、プロジェクトの実行委員である本学の江原勝幸は、実践研究を積み上げることの大切さ、そして研究会等の場でその成果を発表していくことの重要性に触れ、今回のセミナー&ワークショップがその礎として位置付けられることを強調した。その一方で、調査や実験に基づく研究も大切であり、医療現場における研究倫理にも配慮しながら、着実に HPS 研究を前進させていきたいとの決意を述べた。

今回の参加者は、大学関係者あるいは医療関係者に止まらず、福祉や医療に関心を持つ一般の参加者も多数おり、徐々にではあるがホスピタル・プレイ活動に対する社会的な関心の高まりを伺うことができた。この点において本セミナー&ワークショップは、当初の目的を達成できたと判断している。

HPS セミナー&ワークショップ アンケート集計結果

2011年2月19日に開催された「HPS セミナー&ワークショップ」には、120名余りが参加した。この中で、アンケート回答者は88名である。

本イベントを知った媒体についての結果は図のようになっている。



1. 「良いと思ったこと、感心したこと」については、次のような回答があった。
 - ・ HPS の現場での活動（独自）や事例を学ぶことができ、勉強になった。 31 名
 - ・ HPS のことを病院スタッフがもっと理解していくことや連携・協働の重要性を学んだ。 9 名
 - ・ 修了生として色々な現場での活動を知り、勇気づけられた。いろいろなアイデアがあり、学ぶことが多かった。また、小児医療の児環境づくりも参考になった。（これからも不安が沢山あるがお互いに情報交換をし、専門性を高めていければよいと思った） 8 名
 - ・ 職場ですぐに取り入れたり、購入したいツールや取り組みがあり、とても参考になった。 8 名
 - ・ とても内容が濃く勉強になった（ディストラクションツール、プレパレーションの方法等）。 6 名
 - ・ HPS を社会に知らせていくことが必要であると感じた。 6 名
 - ・ ワークショップを楽しみながら体験できた。分かりやすく自分を知る機会になった。 5 名
 - ・ 子どもにとって遊びの重要性を再確認した（改めて痛感した）。 4 名
 - ・ 様々な病院での HPS の活動を知り、日本で小児医療のプレパレーションが進んでいると感じた。ディストラクションツールを年齢や状況に合わせて意図的に使い分けていくことの必要性を学んだ。 3 名

- ・「全ての子どものために、全ては子どものために」のテーマの重要性を感じた。 2名
- ・子どもの目線でディストラクションを行うことの大切さを学び、今後の活用に生かしていける。 2名
- ・全てのプログラムがとても興味深く良かった。 2名
- ・障害児へのあそびの提供を知り、NICUで過ごす病児にも遊びを提供していくことの大切さを感じたので改善していきたい。 1名（以下同）
- ・子どものためによりよい医療を提供するに当たりまだまだ出来ることがあると感じた（Dr）。
- ・活動報告はとても参考になり、資料も豊富で（遠方から）来た甲斐があった。
- ・ワークショップを体験して自分の気持ちを表現することは難しいと感じた。
- ・一日があつというまでした。もっといろいろな話を聞いてみたいと思った。
- ・他病院での実際の事例が聞けて、講義の復習になった（6期生）。
- ・先生やフランスの話聞くことで振り返りの学びになった（修了生）。
- ・一日の内容がとても勉強になり、外部のものでも参加できたことが嬉しかった。
- ・時間通りに進行されたこと。
- ・集団のプレパレーションのメリットとデメリットについて考えさせられた。
- ・HPSの訪問支援はとても素敵だと思った。
- ・フランス先生からHPSの基本を学び、修了生から実践例を報告され勉強になった。
- ・HPで知り一般参加したがひとり1人の子どもが大切にされていることを知り、感激した。
- ・大きな組織の中では新しい挑戦は難しいのに、皆さんの取り組みに大変感動した。
- ・実践の評価と報告を積極的に行っていること。
- ・看護師として採血時のプレパレーションやディストラクション等を具体的に学べた。
- ・ポスター発表は4例とも分かりやすかった（しかしサイズが小さかった）。
- ・事例発表、プレゼンテーションの方法など今後の活動の参考になった。
- ・修了生たちの実践に感激・感動した。こんなリアルで素敵な実践が出来る職種は他にないと思った。いろんな発表、研究方法があり、自分のポートフォリオにも役立てて生きたいと思う。
- ・必要性を感じながら業務上できないと考えていたが、実際の話やツールを見ることが出来参考になった。
- ・職場にHPSがないので看護師としてプレパレーションやディストラクションを行っていく上で参考になった。
- ・HPSをはじめて知り、とても有意義な仕事であると思った。世の中にこんな重症な子どもがいることさえ想像していなかった。
- ・急性期の患者を担当する看護師であるがHPSへの理解が未だ浸透していないので今日学んだことを生かして理解を広めたい。子どものためにという意識の高さに感動した。HPS資格への興味をもった。

- ・重症心身障害児への遊び提供はどうしていいかわからなかったが、今日学んだことを生かして行きたいと思った。
- ・このような豊かな内容を無料で聞けて感謝している（自閉症カンファランス等は高額を支払わなければ受講できない）。

2. 「改善してほしいこと、付け加えてほしいこと」には、次のような意見が寄せられている。

- ・ポスター発表時間が短かったので残念。ポスターをじっくり見て聞きたかった。

6名

- ・講堂（会場）が寒かった。調整して欲しかった。 5名
- ・ポスターが近くで見られるようにホールなどにはじめから展示して欲しかった。 3名
- ・玩具やツールをもっと展示して、ゆっくり見る時間も欲しい。 3名
- ・事前に資料が入手できれば、読み込めて発表者に質問もできたと思う。 2名
- ・発表の間に小休憩がもう少し欲しかった。 2名
- ・事例や資料で紹介されたツールを見る時間が十分に欲しい。 2名
- ・成功例だけではなく、失敗談や苦労している点も聞きたい。 2名
- ・修了生が60名以上になり、いつも同じ病院の発表ではなく色々な病院の活動を知りたい。発表することによってHPS一人ひとりが力を付けお互い力量を高めあえるので。 2名
- ・HPSに理解がある職場ばかりではないので、具体的な処遇、勤務体系、独自の役割りが出来ているのかどうか等を知りたい。 1名（以下同）
- ・HPSのことを広く知ってもらうために、もう少しわかりやすく説明してもらえると良い。
- ・発表者の職歴、現在の担当部署等も記述して欲しい（離職者が勇気付けられるので）。
- ・資料の一部に字が小さくて読めないものがあり残念でした。
- ・パワーポイントの字が小さすぎて読みづらかった。
- ・年に1回はこうした「セミナー&ワークショップ」を開催して欲しい。
- ・マイクがもう1本あれば時間が短縮できと思った。
- ・発表者の入れ替えに時間がかかり発表時間が短縮されていた。
- ・一般参加で素人ですので専門用語（例えば、プレパレーション）の意味を一言説明してくださるとありがたかった。
- ・無料だったのでどんな感じかと思ったが内容が濃くて勉強になった。
- ・実際にプレパレーションやっているビデオが見れるとよかった。
- ・HPS資格取得の方法、関係書類等をホームページで紹介して欲しい。
- ・研究報告の内容、結果、考察にあまり特徴が現れていない。活動報告を聞いてHPSはプレパレーションとディストラクションの専門家と言う印象を受けた。それ以外の役割があるように思う。HPSが目指すものが見え難い。

- ・一つの事例について看護師・医師・保育士が各々意見を出し合うような小グループディスカッションも良いのではないか。
 - ・タイムスケジュールがタイト過ぎるかなと思った。2日間程度とし意見交換の期間を増やして欲しい。
 - ・HPS ではない看護師であるが、もう少し松平先生の話聞いたかった（基調報告）。
 - ・通訳の話す内容が分かりづらかった。
 - ・昼食があると交流会のようになったと思う。
 - ・他職種（例えばOT など）の教育講演などもあればより勉強になる（2日間必要）。
3. 「その他」に寄せられた意見は次のとおりである。
- ・このような取り組みを通して HPS の活動をより広く知ってもらい日本中に広めて欲しい。
 - ・自分では気付かないことで多くの気付きがあったので、こうした機会を増やして欲しい。また、困った時に相談出来るサポートをしてほしい。産学連携職場以外も支援して欲しい（修了生）。
 - ・東京や他地区でも開催してほしい
 - ・見学可能な施設や病院の紹介（一覧表等）があると良い。
 - ・HPS として働きたいと考えた時に受け入れ施設・病院はあるのか？
 - ・病棟保育士として働いているが同じ HPS でも職種によって活動内容が違うと感じています。当院にはCLS もいますが、まだまだお互いにうまくいっていない部分があるので、今後そのあたりをテーマにしてお話できる機会があればよいと思います。
 - ・HPS の活動はとても深いものがあり、看護師でないと難しいものもあると思った。
 - ・私は、保育士でも看護師でもないが HPS が日本中に沢山増えて欲しいと思う。
 - ・子どもの生活は全て遊びであるといわれているが、それは病児でも同じであると痛感した。
 - ・HPS について新聞報道で知り、保育園で病児保育を行っている立場から参加したが、用語一つをみても専門的で難しかった。近くにあいち小児療育センターがあるのでボランティアで参加するなどして HPS についての視野を広めたい。
 - ・これを参考にして病院での遊びディストラクションを取り入れて行きたいと思う。
 - ・Dr としてどのような役割を果たしていけばよいのか模索中です。
 - ・開業医でもやれることは多くあると思った。遊びの力はスゴイです。
 - ・事例集を職場において伝えます。別冊で創ってくださってありがとう。
 - ・病院関係者に HPS の必要性を認識してもらい、HPS（保育士や看護師としてではなく）として働けるようにすることの重要性を感じた。
 - ・重心の子どもの遊びの資料があったら教えてほしい。
 - ・常勤で働いているが、通信・夜間・土日コース等で学ぶ機会があるかどうか教えて欲しい。

- ・ HPS の必要性は職場でまだまだ理解されていないので、できることから具体的に進めていきたい。
- ・ 次回のクールに応募させて欲しい。
- ・ 今後、病院内に HPS の活動が広がることを期待して取り組みたい。ただ最近設立された「子ども医療支援協会」との関係がどうなっているのか、日本の中で似たような職種が分裂するようなことは避けて欲しい。小児医療の一員として共に学び資質を向上させていけるように考えて欲しい (HPS 修了生)。
- ・ 院内保育所の保育士として働いて 2 年目なので、まずは健康な子どもを知り、今後 HPS に資格が取れるよう力をつけて生きたい。
- ・ こうした発表会を今後も開催して欲しい。
- ・ とてもすばらしいので機会があれば HPS の勉強をしてみたいと思った。
- ・ HPS 養成講座が以前のように年 2 回開催されれば良いと思う。
- ・ 今回のセミナーで自分たちの力を信じて謙虚に進むしかないと思った。仲間が集うとエネルギーになるので年 1 回開催し続けてほしい。
- ・ 先生方に抄録をはじめ発表の御指導をいただきました。この場をかりてお礼します。
- ・ 子ども病院に看護師として勤務しているが HPS はいないので、ぜひ一緒に働きたい。子どもは入院だけでもストレスなのに採血や処置で泣き叫んでいる姿を見ると何のために働いているのだろと感じてしまう。もっと HPS の活動が広まることを願う。
- ・ 音楽療法を学んだものとして、遊びは客観的な評価が難しいので、人々の理解を得るためには、多くの実践を積むことが大切だと思った。
- ・ 全国どこにいても教育が受けられるようにして欲しい。最低年 1 回のセミナーを継続して欲しい。HPS と子ども療養支援士との関係はどのようなものか。
- ・ 20 年前 3 歳の息子が県総病院で両耳と鼻の ope をしました。今日の報告を聞いてその時のことを思い出しました。Ope 室前で息子を見送った時の悲しさ、不安を思い出すと今でも涙が出てきます。Ope 後の息子は泣いていました。泣き止んでも暫くすると何かを思い出すように泣きましたので一晩中抱っこして「もう大丈夫よ」と繰り返し話しかけていました。よほど怖い思いを体験したのだろーと思います。親も大変せつない思いをしました。今日の報告を聞き、HPS は子どもだけでなく、母親への重要な支援であると実感しました。これからもこの活動が広がっていくことを望みます。

(社会福祉学科 立花明彦)

遠隔地双方向授業システムの運用と新規システムの導入

【はじめに】

効果的教授法モデルの開発における、ひとつの柱となっているのが、遠隔地双方向授業システムである。

近年、教育の現場においても、情報通信技術 (ICT)の活用がさかんに行われている。遠隔地双方向授業システムは、コスト（講師の旅費等）削減、時間のロスの低減（講師の移動時間の節約等）が可能になる。更には交通機関利用を控えることによる環境への配慮にもつながり、多くの利点があると考えられる。

昨年度、私たちは、遠隔地にある連携大学（神戸大学、川崎医療短期大学、大正大学、千葉大学など）と、双方向で講義が効果的に実施できる授業システムを確立することを一つの目標と考え、システムの検討、導入、試験的運用を行った。

本年度（平成 22 年度）は、昨年度に試験運用したシステムを、HPS 養成講座において、実際に安定して活用することを目標とした。それとともに、外国人講師（英国在住）が、自国にいながら、日本の会場（メイン会場）に向けての遠隔講義を行い、さらには、同一時間に、日本国内の他の地点（サブ会場）においても講義を見聞することを可能にできる新規システムの検討、および導入も行った。

【遠隔地双方向授業システムの活用】

平成 22 年度 HPS 養成講座の講義において、本システムを活用した。

1. 日 時：平成 22 年 11 月 30 日(火)～平成 23 年 2 月 25 日(金)
2. 場 所：静岡県立大学短期大学部 101 講義室
3. 参加者：静岡県立大学短期大学部、神戸大学、川崎医療短期大学、大正大学
4. 使用システム：sony-pcsXG80、sony-pcsG70、DM-Encoder、sony-pcsXG55
5. 運用状況：

HPS 養成講座の講義は、静岡県立大学短期大学部 101 講義室をメイン会場として行われた。101 講義室は、昨年度、遠隔地双方向授業システムが可能となるべく環境を整備したところである。

静岡県立大学短期大学部は、メイン会場である。サブ会場 3 地点（神戸大学、川崎医療短期大学、大正大学）と、遠隔地双方向授業を実施した。

一つの特徴として、システムを、2 系統用いたことが挙げられる。

第一系統は、静岡県立大学短期大学部をメイン会場として、sony-pcsXG80 を使用して、サブ会場 2 地点（神戸大学、川崎医療短期大学）と多地点接続を行い、双方向授業を行った。

第二系統は、静岡県立大学短期大学部をメイン会場として、sony-pcsG70 を使用して、サブ会場 1 地点（大正大学）と 1 対 1 の単独接続を行い、双方向授業を行った。

今回、あえて 2 つの系統を用いた理由は、以下の通りである。本来は、静岡県立大学短期大学部をメイン会場として、sony-pcsXG80 を使用して、サブ会場 3 地点（神戸大学、川崎医療短期大学、大正大学）と多地点接続を行い、双方向授業を行う予定であった。しかしながら、事前の通信試験で判明したことであるが、大正大学は、異なったシステム（ポリコム社）を用いているため、その状況下で多地点接続を行うと、他の通信先における映像の質が変化してしまうという不具合が起きてしまうことが明らかとなった。

そこで、映像の質が変化してしまうことを避けるために、あらかじめ、系統を分けておく必要があった。

われわれが、昨年度に構築したシステムにおいて、本来、sony-pcsG70 は、sony-pcsXG80 にトラブルがあった際の副次的システムとして考えていたのであるが、今回は、当初の想定とは若干違った形で、役に立つこととなった。

いずれにしても、バックアップ・システムを備えていたことにより、通信の不具合を回避することができた。バックアップ・システムの必要性が明らかとなった。現実的にバックアップ・システムが十分に機能したと考えられる。

その他、全体的に、講義期間を通してみて、重大な問題は発生しなかった。遠隔地双方向授業が、滞りなく実現できたと評価している。

一方で、実際上の微細な問題は、散見された。具体的には、講師及び受講生の音声を、サブ会場に確実に届ける必要があるが、その際に、音声マイクの性能との関連もあるが、周囲の騒音等により講師や受講生の音声通信先に聞こえないといった状況がしばしば起こってしまった。マイクの性能を見極めたうえで、講義形態に応じた配置や使い分けが必要である。

また、拡声器や通常の音声マイクの使用によっては、ハウリングを引き起こす場合があるので、注意が必要であった。

また、講義において、講師がパワーポイントを使用するケースが多いのであるが、当初、教室内の風景もサブディスプレイとして同時に表示していたが、パワーポイント使用時は却って障害となり、通信先にとって非常に見えにくい状態となってしまった。そこで、演習時以外は、教室風景の表示を止め、メインディスプレイと講師のみが表示される状態にした。

また、DM-Encoder は、本来の目的は、遠隔システムがトラブル等によりダウンした場合の予備システムであるが、今回は、期間中の講義を全て配信（ストリーミング）および、録画することに用いた。

【HD ビデオ会議システムと Skype を連動させたネットワークの構築】

HPS 養成講座や HPS の研修において、HPS の発祥の地である、英国の HPS の講義を受ける機会は、多く持たれることが望ましい。しかしながら、英国から、講師として頻繁に来日してもらうのには、交通費、講師の移動時間といった問題から、以前は難しいと考えられていた。

今回、それを解決するシステムを構築した。ビデオ会議システムと Skype を連動させることにより、英国人講師が、自国にしながら、静岡および他の日本の地点に講義を行うことが可能となった（図 1）。

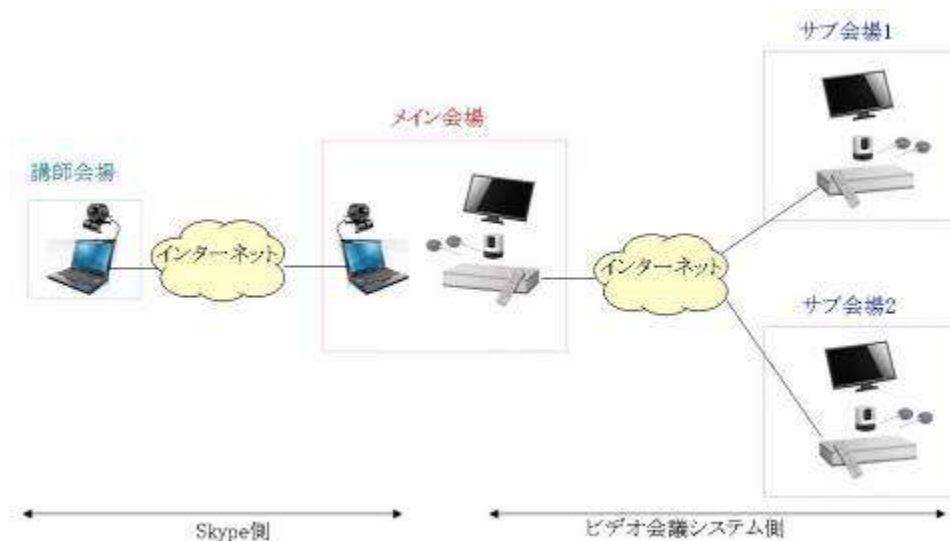


図 1. ビデオ会議システムと Skype を連動させたネットワーク

平成 22 年 7 月に事前の実験として、英国エジンバラの、Frances 氏（英国 HPS）と、静岡県立大学短期大学部 101 講義室との間で、Skype でのテレビ電話ができることを確認した。その後、平成 22 年 8 月 7 日（土）に、本学 101 講義室を拠点として、英国エジンバラの、Frances 氏（英国 HPS）と Skype にて接続し、さらにビデオ会議システムにより、神戸大学をサブ会場として接続した、特別講義を実施した。今回、サブ会場は、1 会場のみで行った（図 2）。



図 2. Skype とビデオ会議システムを用いた特別講義

メインのディスプレイには、英国の講師が大きく映し出され、サブのディスプレイには、サブ会場の様子が映し出され、3 地点が、一つの空間を共有している感覚が得られた。受講生からは、英国と日本をリアルタイムでつないでいることが実感できたという感想が得られた。英国の講師からは、すぐにこのシステムで講義をする状態に慣れたという感想が得られた。講義は、滞りなく実施できた。

【今後の展望】

本年度は、遠隔地双方向授業システムを、HPS 養成講座において、実際に活用することができた。また、ビデオ会議システムと Skype を連動させることにより、英国人講師が自国にいながら、静岡および他の日本の地点に講義を行うことが可能となった。今後は、今回成功した通信を、安定して、常に滞りなく運用していかなければならない。

遠隔地双方向授業システムを、円滑に行っていくためには、様々な機器を適切に操作する必要がある。システムが複雑になると、それに伴い機器の操作も複雑さを増していく。有効なシステムを開発しても、それを実行できなければ、十分な活用は望めない。

そこで、本年度は、機器のマニュアルの整備に着手した。内容は、

1. ビデオ会議システムの取り扱いについて
2. ビデオ会議システムを Skype との連動について
3. DM-Encoder の取り扱いについて

の、3 つである。

いわゆる、機械に強くない人であっても、システムを利用できることを目的に、マニュアルを完成していく必要がある。

また、システムが複雑になると、トラブルが発生した際の対処が困難となる場合が多い。生じる可能性のあるトラブルを想定して、わかりやすいトラブルシューティング・マニュアルも作成する必要がある。

文献

- 1) HD ビデオ会議システムと Skype を活用した遠隔講義環境の構築.

湯瀬裕昭、森裕樹、吉田直樹、江原勝幸、松平千佳. 情報処理学会研究報告. 2010 年.

(歯科衛生学科 吉田直樹)

ホームページの運用

ホスピタル・プレイに関する本学の取組や活動状況を広く発信するため、HPS 専用サイト (http://bambi.u-shizuoka-ken.ac.jp/hps_site/index.html) を本学 Web 上に開設し、インターネットを活用した広報活動を展開している。

これまでに、本学学生や教員、小児医療関係者、さらには一般市民による閲覧を想定し、各閲覧者に応じたコンテンツを充実させてきた。学生や一般市民に向けた内容は、写真やデザインを多用し、本学の取組内容や小児医療における HPS の役割について平易に理解できるメニューを用意した。一方、小児医療関係者に向けた内容は、最新の研究動向や HPS による活動状況を掲載し、ホスピタル・プレイ活動の動向を時系列的に示した。

平成 22 年度は、各コンテンツの関係性を明確化させるため、リンク機能を拡充した。これにより、膨大な情報量を画一的に掲載するのではなく、ホスピタル・プレイに関する知識を段階的に深めていけるように、柔軟なサイト構成とした。また、全体的なデザインについては、本学 HPS 養成教育の基本理念である「すべての子どものために、すべては子どものために」と対応し、赤や橙などの暖色系を基調とした色遣いによって、子どもに対する医療の「やさしさ」を表現した。

なお、平成 22 年度以前と比べて大幅に修正されたコンテンツを下記に詳述する。

・トップ画面：

当該頁は、各コンテンツへの導入として、シンプルなメニュー表記とデザインから構成されていた。しかし、本学学生や継続的な閲覧者より、更新情報に関するリアルタイムな表記について多数の要望が寄せられた。そこで本年度は、迅速な情報公開や更新記録の表記を目的とし、「更新情報」のスペースを確保して、適時速やかに更新情報を掲載した。

その結果、閲覧者からの問合せ時には、更新記録に基づく対応が可能となり、スムーズな情報提供が実現された。

・公開セミナー：

平成 23 年 2 月 19 日(土)に本学にて開催された「HPS セミナー&ワークショップ」の詳細を掲載した。開催の案内や当日のプログラム内容、さらに実施報告までを継続的に情報更新することで、閲覧者に対して当日の内容を幅広く発信することができた。また、今回の「HPS セミナー&ワークショップ」では、専用サイトを通じた申込みが多数あった。

・論文・報告書：

ホスピタル・プレイに関する幅広い知見、情報を収集し、これまでの HPS 養成教育において蓄積された資料と合わせて掲載した。また、子どもと遊びをテーマとする各教育機関や団体と連携し、相互リンクなどを通して情報共有を促進させた。

(HPS 事務局)

ホスピタル・プレイ研究活動支援

(1) HPS 修了生による職能団体の形成と活動

平成 19 年度から開始された HPS 養成講座は、第 1 クールから第 6 クールまで実施され、合計 34 名の修了生を送り出している。修了生たちの出身地は静岡県下のみならず、東海、関西・中四国、関東、東北地域まで広がっており、各々の職場や地域で養成教育プログラムでの学びを生かした活動が展開されている。

しかし、全ての修了生が必ずしも HPS の専門性を生かした活動を十分展開出来ているわけではなく、一人ひとりが様々な特性を持つ子どもたちの支援に関し、試行錯誤を繰り返しつつ実践を行っている。また、子どもたちと HPS を取り巻く人的・物的環境も多くの課題を抱えており、せっきくの学びを生かすことができていない修了生もいる。

こうした中で、各修了生からお互いが連携し、情報交換を行い、理論と実践を蓄積する研究活動を展開する組織を形成する必要性が唱えられるようになった。そして、数ヶ月にわたる修了生とスタッフの献身的な準備活動により、2010 年 4 月 24 日に HPSJ(Hospital Play Specialist Japan：名称検討中)が結成された。

本会は、病気や障がいを持つ子どもたちへのより良い支援のために、研修と情報交換、相互の親睦を図ることを目的とし、HPS 養成プログラム修了生を会員とするが、将来は HPS 活動に興味・関心を持つ学生にも参加を呼びかける予定である。当日は修了生 22 名と講師や大学スタッフ数名が参加し、会発足の趣旨、規約について討議・確認された。また会の代表(代表と副代表)及びブロック代表(関西、関東、東海・中部の 3 ブロックより各 2 名)を選出した。今後は、各ブロック単位での活動をベースとして年度単位で全体会を行い、日常の情報交換を積極的に行う体制を作ることにした。

昨年度、修了生の活動は各病院や施設に益々広まってきているが、この間の大きな変化は、活動の範囲を在宅で生活している病児や障害児の支援にまで拡大してきたことである。さらに、各自の活動を支えているのは修了生相互の情報交換であるが、特に各ブロックで自主的に展開されてきたブロック会議での情報交換や知識・技術の修得は大きな意味を持つ。

こうした中で、東海ブロックの静岡地区では毎月 1 回定期的に「事例研究会」を開催してきた。この事例研究会は、各自が輪番で担当する子どもや子どもを巡る環境を紹介し、参加者との意見交換によってより質の高い HPS としての活動を展開していくことを目的としている。昨年 5 月から開始され、1 月までに 7 回開催されたが、その成果は 2 月に開催された「HPS セミナー&ワークショップ」で発表すると共に、当日資料の「ホスピタル・プレイ・スペシャリスト事例集第 1 号」として冊子にまとめられた。

(2) 研究活動の推進

HPS 養成講座修了生の中には、各々の子どもの発達や症状の特性に応じたディストラクションやプレイ・プレパレーション技術を開発・実践したり、あるいは医療スタッフの一員として活躍している者もいる。さらに、これらの活動をカンファランスや職場研究会に資料として提出し、保育や医療系の学会、研究会に発表する者も徐々に増えてきている。

また、論文形式にまとめ、各学会誌や研究誌に投稿する者もいる。これらの活動は、自らの実践を理論化し、普遍化する力量を高めるだけではなく、HPS の意義や役割を学生をはじめとして関係者に広く知らしめるために極めて有効である。

しかしながら、今までこうした研究活動を展開した経験が少なく、優れた実践がありながらも理論化することを躊躇してしまう場合も多い。そこで、教育 GP 運営実行委員会ではこれらの研究活動を積極的に支援する体制を組み、事例研究の方法、抄録や論文の作成方法を助言、指導している。

その活動の一環が先に紹介した静岡地区の「事例研究会」であるが、今年度はその活動を HPS 修了生全体にまで拡大して実施することにした。具体的には、発表者を静岡地区に限らず修了生全体から募って順次発表すると共に、開催場所を各ブロックの近隣にしたり、遠隔地双方向授業システムを用いて各ブロックでも研究会に参加できるようにすることにした。

今年度は、本学学生を対象とする HPS 入門講座開講も見据え、こうした事例研究会の成果を国際シンポジウム等で事例集として役立てる予定である。

(HPS 事務局)

資料

体系的な HPS 養成教育プログラムの開発

Hospital Play Specialist

I. 取組の背景

静岡県立大学短期大学部では平成 19 年度より 3 年間、文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」委託事業として、【**離退職保育・看護資格保有者のためのホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)養成教育プロジェクト**】を実施してきた。

日本初の本格的な HPS 養成講座の実施により、これまでわが国の医療現場ではほとんど注意が払われてこなかった、子どもや家族に寄り添うホスピタル・プレイについて、病院や福祉施設を中心に積極的に展開し、子どもにとって医療との関わりが肯定的な体験になるよう働きかける、革新的な試みにチャレンジしている。

<HPS 養成教育事業の様子>

- *学校教育法 105 条に基づき、HPS 資格認定書を交付
- *現在までに、62 名の HPS を輩出
- *今年度より、「静岡県立大学短期大学部社会人専門講座」として実施中

☆英国から HPS を招聘し、高い実践力を養う☆



☆少人数制ディスカッション形式の参加型授業☆

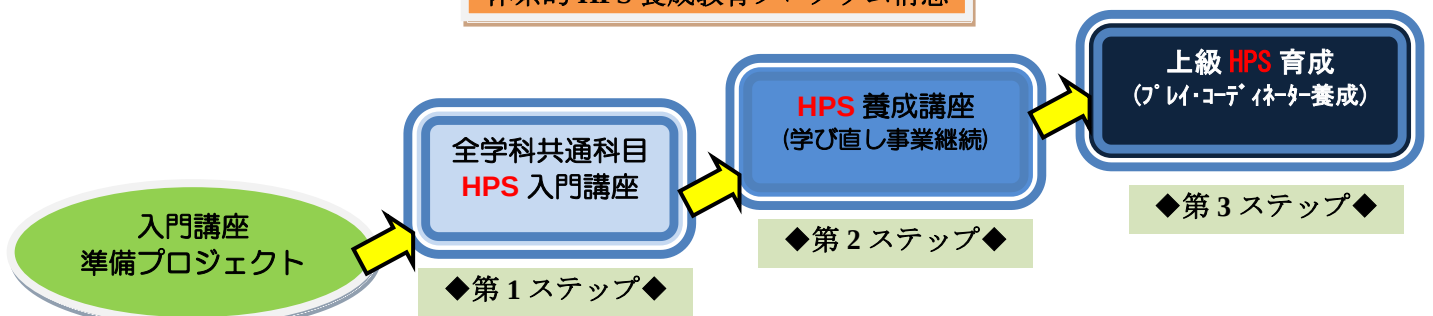


II. 目的

本学の取組は、HPS としての専門性の確立・向上及び医療現場での専門職としての定着を追求する、一貫した **HPS 養成教育プログラム構築に向けての準備プロジェクト**である。平成 22 年度以降も HPS 養成教育事業を継続的に実施し、この事業を HPS 養成過程の第 2 ステップに位置づける。その次ステップとして、経験・実績を積んだ実力を有する HPS を対象に、困難ケースに対応できる上級 HPS の育成を第 3 ステップで目指す。そして、本学学生を対象に基礎資格の段階で HPS マインドをもった看護師・保育士などを養成する第 1 ステップを HPS 入門講座とする。

これら体系的な HPS 養成教育プログラム構築に向けた、「**HPS 養成教育モデルの開発**」、「**効果的な教育方法モデルの開発**」、そして「**産学連携による小児医療モデルの開発**」が本取組の目的である。

体系的 HPS 養成教育プログラム構想



Ⅲ. 実施状況

本取組の目的である体系的な HPS 養成教育プログラム構築に向け、次の 3 つのモデル開発を進めている。

(1) 養成教育モデルの開発

本学の医療・福祉系専門職養成教育の中に HPS 入門講座を取り入れ、主体的に講座を履修する学生に HPS としての視点から対象者中心のケアに関する知識・理解、対人援助技術、専門的倫理・価値、クリティカルで創造的な思考力を身に付けさせるための養成教育モデルを開発している。

現在は主に、ホスピタル・プレイ・スペシャリストに求められる、知識、技能、そして態度・習慣を明らかにする作業を進めている。

(2) 効果的教授法モデルの開発

HPS 入門講座における教育方法が効果的で適切に実施されることを目的に、他大学との連携や遠隔講義システムを用いた教授法の開発を行っている。これまでに構築したシステムは、写真に示す通りである。



英国と Skype を交えた多地点双方向授業の様子

(3) 産学連携による小児医療モデルの開発

HPS 修了生及びその所属する病院・施設とのこれまでの相互連携を生かし、①病児及び家族を対象とする病院、②障害児及び家族を対象とする福祉施設、③自宅療養する子ども及び家族を対象とする在宅支援に特化した HPS の専門性とその養成教育の確立等を目指す。

これらを総合的に進め、英国 HPS 養成教育機関との協力とともに、第 1 から第 3 ステップまでの HPS 養成教育プログラム構築について検討し、段階毎の教育目標や内容を明確化した養成モデルを開発する共同研究を行う。また、病院・福祉施設・在宅療養での子ども・家族中心の医療ケア実現の実践・研究を進め、研究報告を行うとともに、協働で HPS の社会的認知度を高めるリーフレットを作成する。



日常の遊び

在宅での HPS 支援



障害のある子どもへの遊び支援

母親同室による採血方法の実施



Ⅳ. 今後の展開

上記 3 つのモデル開発をさらに推進し、本学学生の学士力確保や教育力向上に結び付く教育プログラムを構築していく。また同時に、看護師や保育士など、子どもに関わる専門職のキャリアラダーを確立していきたい。

■ 平成 22 年度 HPS セミナー&ワークショップ

静岡県立大学短期大学部

ホスピタル・プレイ・スペシャリスト

HPS セミナー&ワークショップ



文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム

遊びのもつチカラと価値を語ろう



～すべての子どものために、すべては子どものために～

静岡県立大学短期大学部では、平成21年度より文部科学省「大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム」として「体系的なホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)養成教育プログラムの開発」に取り組んでいます。

HPSとは、「Play(遊び)」をツールとして病児の子どもや障害のある子どもの医療との関わりを支える専門職であり、本学は平成19年度より日本初のHPS養成教育を実施しています。

小児医療においてHPSの活動は徐々に広まりつつあると思いますが、これまで以上にホスピタル・プレイの役割をご理解いただくとともに、その必要性を発信していく活動が必要であると考えております。

そこで、本学HPSセミナー&ワークショップでは、社会一般に向けたHPS養成講座修了生によるPlay技術の発信と、英国HPSのFrances Barbour氏による対話を通して、遊びの持つ可能性を明らかにしていきます。

多くの皆様のご参加をお待ちしております。

2月19日(土) 9:00～12:00

(要 料) 9:00～9:30 本学講堂にて

開 会	田中 治宣	(静岡県立大学短期大学部 部長)
接 拶	木苗 直秀	(静岡県立大学短期大学部 学長)
教育GP基調報告	体系的なHPS養成教育プログラムの開発 「この職種に求められる知識・態度・技能に関する分析とカリキュラムの形成」 松平 千佳 (静岡県立大学短期大学部 准教授)	
小児医療モデル開発に関する発表	「産学連携購入物品によるホスピタル・プレイ活動の検討」 (MRI検査のプレバレーションに取り組んで) 寺田 智子 (静岡県立小児病棟) 「スクリーンを介した乳児のストレス軽減方法の開拓」 小長谷 秀子 (静岡県立総合病院) 「病棟別自衛に迫ったHPSの遊び支援の専門性の向上と病児の療養環境改善に向けた取組」 市川雅子・西尾恵美 (大田区立総合医療センター) 「小児二次医療圏におけるHPS普及モデルの開拓」 望月 実希美 (静岡県立総合病院) 「習得疾患の子どもが受ける治療に対するプレバレーション・ディストラクションの効果」 小島広江・畑井郁子・大矢佳代 (総合病院 聖隷三枝病院)	

(その他)

2月19日(土) 13:00～16:30

(休 憩) 12:00～13:00

HPS事例発表 (HPS養成講座修了生による活動報告)

「心臓カテーテル検査のプレバレーションに取り組んで」
田中 久美子 (あいち小児保健医療総合センター)

「採血室でのディストラクション」
豊田 早苗 (東京都立小児総合医療センター)

(その他)

HPSワークショップ

「子どもにやさしい医療を提供するための方法」
Frances Barbour (Stevenson College HPS養成コース責任者)

ポスター発表

「チャイルド in NICニプラネットの活動報告」
船井幸子・藤田えり (名古屋市立大学病院)

(その他)

閉 会 江原 勝幸 (静岡県立大学短期大学部 准教授)

期 日	平成23年 2月19日(土)
会 場	静岡県立大学短期大学部 講堂及び食堂
対 象	一般市民及び本学学生、本学教員、HPS、医療福祉等HPS関係者
参加費	無 料
お申込	申込書は、ホームページにて入手可能です。 < http://bambii.u-shizuoka-ken.ac.jp/hps_site/index.html > ※なお、当日参加も可能です。ただし、会場準備等の都合がありますので、ご参加の場合は事前にお申込みを頂けると幸いです。
主 催	静岡県立大学短期大学部
【後 援】	地方独立行政法人 静岡県立病院機構 社会福祉法人 静岡県社会福祉協議会 社会福祉法人 静岡市社会福祉協議会
連絡先	静岡県立大学短期大学部 HPS事務局 hps-japan@u-shizuoka-ken.ac.jp TEL&FAX: 054-202-2652



〒422-8021 静岡県静岡市駿河区小島2-2-1

■ J R静岡駅北口6番バス乗場から、美和大谷線(東大谷方面行)または小島線に乗り、小島駅前または駿輪出入口下車、徒歩2～3分

■ J R静岡駅南口バス乗場から、みなみ線(島田/清水方面行)に乗り、小島駅前下車、徒歩2～3分

※公共の交通手段をご利用ください。

■2011年2月19日(土)「HPSセミナー&ワークショップ」

開 会



田中丸 治 宣
(静岡県立大学短期大学部部长)

学長挨拶



木 苗 直 秀
(静岡県立大学短期大学部学長)

教育 GP 基調報告



松 平 千 佳
(静岡県立大学短期大学部准教授)

産学連携による療養環境整備に関する報告



棚 瀬 佳 見
(あいち小児保健医療総合センター)



小 島 広 江
(聖隷浜松病院)

事例発表



深 井 真由美
(静岡県立総合病院)

ワークショップ



Frances Barbour
(英国 Stevenson College HPS 養成コース 責任者)

ポスター



平野祐子
(中部労災病院)

まとめ



江原勝幸
(静岡県立大学短期大学部 准教授)

2010年4月14日付 静岡新聞

斬新 一が熱演

藤原さんは「県内での公演は3回目。普段あまり一緒に演奏されない楽器の競演を楽しんでもらえたと思う」と話した。

「HPS」への理解求め入門書

県立大短期大学部 松平准教授が出版

小児医療の現場で、遊びを通して治療に臨む子どもの不安を和らげる専門職「ホスピタル・プレイ・スペシャリスト」の養成に取り組む県立大短期大学部の松平准教授がこのほど、「ホスピタル・プレイ入門」(A5判、176ページ)を建邦社から出版した。

同書は2007年から全国で唯一、保育士と看護師が対象に、HPS養成講座を開いている。この講座の講師を務める松平准教授は、ユニ・タイ氏が海外での実践例を紹介しながら、具体的な仕事内容を解説している。県内の病児などでは活躍中の講師修了生による報告もある。

松平准教授は「遊びは子どもにとっての癒やし。医師、看護師も医療をしやすい」と話し、HPSへの理解を求めている。

出版した「ホスピタル・プレイ入門」を手にする松平准教授＝県立大短期大学部



「HPS」の養成講座を開いている。この講座の講師を務める松平准教授は、ユニ・タイ氏が海外での実践例を紹介しながら、具体的な仕事内容を解説している。県内の病児などでは活躍中の講師修了生による報告もある。

松平准教授は「遊びは子どもにとっての癒やし。医師、看護師も医療をしやすい」と話し、HPSへの理解を求めている。

献血車

(16日)

- ▽静岡市清水区 午前9時半～11時半、午後0時半～4時 区役所
- ▽静岡市清水区 午前9時半～11時半、午後0時半～4時 区役所
- ▽静岡市清水区 午前9時半～11時半、午後0時半～4時 区役所
- ▽静岡市清水区 午前9時半～11時半、午後0時半～4時 区役所

▽浜松市中区 午後0時半～2時15分、消防局南消防署

2011年1月24日付 朝日新聞

大学

勉強中

遊びで病児支えるプロ養成

静岡県立大短大 社会人講座

病児は病気を治す場所。だが、講義を受け持つ松平准教授は「ただ心臓を動かすだけではない。命を助ける場だから、子どもたちの命を助ける。ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)を養成している。看護師や保育士ら有資格者向けの講座で、修了生たちは各地の病院や児童養護施設で活動している。

入院中の子どもと遊ぶHPS養成講座修了生の望月美さん(50)＝静岡市駿河区の静岡済生会総合病院

2007年度に全国で初めての本格的なHPS養成講座を開講。文部科学省の「大学教育推進プログラム(教育GPI)」にも選ばれ、養成と共に、他大学でも養成に取り組めるよう教育プログラムの体系化を進めている。

「子どもたちが病気を治す場所。だが、講義を受け持つ松平准教授は「ただ心臓を動かすだけではない。命を助ける場だから、子どもたちの命を助ける。ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)を養成している。看護師や保育士ら有資格者向けの講座で、修了生たちは各地の病院や児童養護施設で活動している。」

「子どもたちが病気を治す場所。だが、講義を受け持つ松平准教授は「ただ心臓を動かすだけではない。命を助ける場だから、子どもたちの命を助ける。ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)を養成している。看護師や保育士ら有資格者向けの講座で、修了生たちは各地の病院や児童養護施設で活動している。」

遊びを使って病児を支援するホスピタル・プレイ・スペシャリスト（HPS）を紹介する「ホスピタル・プレイ入門」（建帛社・2100円）が発刊された。ホスピタル・プレイの理論と方法がまとめられたガイドブックは日本では初めて。編著者で訳者の一人の松平千佳・静岡県立大学短期大学部准教授に本書の概要と日本での現状・課題を聞いた。

ホスピタル・プレイ入門

編著者訳者 インタビュー

静岡県立大学短期大学部
社会福祉学科

松平 千佳 准教授



HPSとは病児や障がいのある子どもとその家族に対し、遊びのプログラムを提供することで、苦痛や不安を軽減させ、支援していくという専門職だ。静岡県



立大学短期大学部では07年から文部科学省の委託を受け、HPS養成教育事業を実施している。

「遊び」の重要性が十分に認識されていないのが現状です」と松平准教授は言

日本初のガイドブック

「遊び」を使って病児を支援

ジョン・タイ氏の講演内

容をもとに、日本の状況での考察も加え、ホスピタル・プレイの必要性をわかりやすく説いたものです。HPSの日本での認知度はま

「子どもは遊びを通して成長します。特に病児という困難にぶつかっている子どもには、遊びが大きな癒しと立ち向かっていく能力

をもたりますのです」

本書にはそれを裏証する事例が、遊びの様子や道具となる人形などの写真とともに盛り込まれている。処

って治療の説明をいう「プレイ・フレブレーション」の技術など、ホスピタル・プレイの専門性を具体的に学ぶことが出来る。

「子どもの立場が弱い日」本でHPSを定義させていくことは、英国以上に課題が多いと思われる。しかし

子どもの頃の病院での不快な経験は、大人になってからも医療への不信感につながるなど、引き起こすことが少なくない。

「今後は日本に馴染んだ近は現職の看護師などがスキルアップのために、応募してくる人が多いとい

平成 21 年度文部科学省
大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム
「体系的な HPS 養成教育プログラムの開発」

平成 22 年度 事業成果報告書

執 筆 者

【教育 GP 運営実行委員会】

運営実行委員長

松 平 千 佳 短期大学部社会福祉学科准教授

運営実行委員

江 原 勝 幸 短期大学部社会福祉学科准教授

立 花 明 彦 短期大学部社会福祉学科准教授

吉 田 直 樹 短期大学部歯科衛生学科准教授

事務局

短期大学部 HPS 事務局

〒422-8021 静岡県静岡市駿河区小鹿 2 丁目 2 番 1 号

静岡県立大学短期大学部 教育 GP 運営実行委員会

TEL/FAX : 054-202-2652
